Endless Game

紀田智也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｎｄｌｅｓｓ　Ｇａｍｅ

【Ｎコード】
Ｎ２６６７Ｙ

【作者名】
紀田智也

【あらすじ】
悪魔と契約して始めた馬鹿げたゲームを終わらす物語。
主人公はなぜかその物語で苛められていた女子生徒と入れ替わりでこの物語に来てしまった普通の女子高校生。
面倒くさがりやの主人公が神様のお願いを聞き入れつつ（？）、元の世界に帰還するために孤軍奮闘したり、共闘したりする。勿論、邪魔者はたくさんいたりいなかったり。

設定

舞台
日端によって２０１０年が永遠ループの中、日端がいる学園が舞台。学園の名は【海華学園】。お坊っちゃんお嬢様が集っている私立学園。

メインキャラクター
織原詩歌（おりはらしいか）
高校２年　１５７ｃｍ　４６ｋｇ　今作の主人公
一応可愛いと思える容姿。髪の毛絶賛伸ばし中の女子高生。
逆ハーされる女や自分に自惚れている男が嫌い。いたら徹底的に無視。
裕福な家庭で育っているが、我儘少女には育ちませんでしたよかった。
趣味は読書、好きなことは睡眠とゲーム。
「平穏に過ごさせてほしいものだよ、まったくもって」

日端美乃（ひばたみの）
高校２年　１５３ｃｍ　３９ｋｇ　逆ハー女
無駄に可愛い。周りの人みんな見惚れるぐらい可愛い。
性格がとてつもなく悪い。いわゆる悪女。
趣味は男を騙すこと、好きなことは男に愛でられること。
「私が幸せになるには多少の犠牲も必要なのよ☆」

攻略キャラクター
この学園では生徒会・風紀委員会にイケメンが集っており、攻略対象はこの２つに属している男達。

生徒会
久我直人(くがなおと)　高校3年
生徒会長。金髪赤眼のクールビューティー。

紀田裕太(きだゆうた)　高校3年
生徒副会長。明るい茶髪に黒目。やんちゃでお節介焼きですが、そこもいいとこ。

馬場空也(ばばくうや)　高校2年
生徒会書記。黒髪紫眼(しがん)。ツンツンデレツンデレツンツン、なんてお歌がお似合いな男の子。

橘薫(たちばなかおる)　高校2年
生徒会会計。黒髪に赤のメッシュ入り、茶眼(さがん)。男の娘なんて言ったらメッ！

風紀委員会
辰巳裕樹(たつみゆうき)　高校3年
風紀委員長。黒曜石のような髪と目。冷静沈着だが、久我とよく喧嘩しています。

辰巳功太(たつみこうた)　高校3年
風紀副委員長。紫髪に隻眼。稀に見る熱血君、近づいたらもれなく暑さが貰えます。

雲雀涼夜(ひばりりょうや)　高校2年
風紀委員。茶髪の碧眼。物腰が柔らかいが、腹黒です。

清水雅人(しみずまさと)　高校1年

風紀委員。赤髪紅眼。人懐っこく、お茶目。常識人じゃない人が嫌いな子。

隠しキャラ
どのゲームでもありがち設定。いわゆる隠しキャラ。
ある条件を満たさないと出てきません。

奥村駿（おくむらしゅん）
詳細不明。主人公と面識あり……？

サブキャラクター
柴田菜々（しばたなな）　高校2年
主人公が自分の世界に行く代わりに、主人公の世界に飛ばされた女の子。
日端に苛められており、超次元パワーで難を逃れた。

紀田春香（きだはるか）　高校2年
主人公の友人。主人公が入れ替わったことに気づいている一人。

ダブルプロローグ

私がどれだけの苦労を費やしてあの高校にいったのだろう。
留年を逃れるためにどれだけ大嫌いな勉強を毎日したんだろう。
数え切れない苦労を犯してまで、私は今日まで頑張ってきた。それなのに。
どうして私は認められないのっ？　認められて可愛がられて、愛されていきたいだけなのに。
あぁ、そうかそうよね。私が悪いんじゃない。周りが悪いのよ。
私を認めない周りが悪いのよ。そうよ、そうなのよ！

なら、私を認めさせてあげるわ。私の周りが壊れたってどうも思わないし。
私を馬鹿にして、嘲笑って、踏みにじった奴らなんて知らないわ。

「私が幸せになるには多少の犠牲なんて付きものだもの」

――頂点にたつ、この私が。
だって私が幸せじゃなきゃ、この世界は狂っているもの。

ね、貴方もそう思うでしょ？

うふふっ、私のお願い事はぜーんぶ叶えてくれる。
貴方が叶えてくれる、全部……ね？

「ん……え、はっ？」

朝起きたらそこは屋上だった。無駄に肌寒い風を浴びながら、体を起こすと見慣れない制服に身を包んである。ただ、見慣れたスクールバックが手元にあったのは少し心の支えになったかもしれなかったけれど。中身は見慣れないものだったので、一瞬で閉じました。

なんで自分こんな状態になってんの？　どういうことなの？　こんなの絶対おかしいよ！！

って、落ち着け、落ち着け自分。きっとこれはほら、アレだよ。俗に言う夢だよ。

起きたら「夢オチかよ」って思えるよ自分。思い切って頬を抓って――

「っ、痛っ！」

できなかった。夢オチとかそんなの全然できなかった。

涙で滲む視界に変わらず映るのは、どんよりとした灰色の空と見知らぬ街並みだけ。
自分が知っている世界は、一向にやってこない。

「マジ、どういうことなの……」

重い溜息が口から漏れ、考えることすら面倒くさくなる。
なんて今の状態を飲み込むのに諦めかけていると、また肌寒い風が吹く。さっき吹いた時よりも体が冷え込み、ぶるぶるっと体を震わせる。と同時に、スクバの中から振動が腰から伝わってきた。

「……もしかして」

勢い良くスクバを開け、中を探るとやっぱりあった文明の機器、携帯電話。
着信画面を見ると、見知らぬ電話番号。ということは、通話ですか。

「……もしもし」
『あぁ、やっと繋がった。よかったです、貴方が来て下さって』
「……某アニメにある宗教団体の人？　勧誘ならお断りしときますけど……」
『違いますよ、私は――神様です』
「……すいません、聞こえなかったです。何て、言いました？」

『仕様のない方ですね……もう一度言います。私は

――神様です』

あまりに淡々と紡がれるその言葉に、呆然とし言葉を失う自分。
今起きてから数分程しか経っていなくて、分からないことだらけだったけどこれだけは言える。
この電話の主に混乱させられているってことは、確かに言える。

（見知らぬ世界には神様なんているんですね）

（なんて感想しか残せないけど、私間違ってないよね？）

少しの会話

これまでのあらすじ。
起きたら私は見知らぬ場所にいて、帰りたいって心の底から願っていたら電波障害起こした人が「私は神様です」って……

『ちょ、待ってください。あらすじが確実に貴方の手によって改ざんされていますから、それ以上口に出さないで！　貴方怖い！』
「え、なに聞こえない。というか聞きたくない。ってか、神様なんなら今すぐ私を元の世界に帰還させろ」
『聞こえていますよね。その反応聞く限り聞こえていますよね、私の声』

本当は心細くなった自分にとって、今の会話はかなり心の支えになっている。
元いた世界の友人と同じような接し方もとても支えになる。彼女（声質が女っぽいので）の会話は、本心から言ってみれば続けていたいものだ。

「切るよ、切るよ？　電波女さん切りますよ？」
『いや、切らないで！　切らないでください！』

うわぁぁ、と縋る彼女が面白くて小さく笑う。
だけど、それが案外不服だったみたいで、次の瞬間、怒気を含んだ声が

『あー、もうっ！　これ以上無駄話をしている暇ではないのです！
貴方には、この世界を救ってもらう必要があるのですから！』

おかしな言葉と共に、耳に響いてきた。やっぱり切った方がいいかな？

＊　＊　＊　＊　＊

あれから言い争いになって数十分。激しい口論の末、ようやく自分がどうしてこうなっているのか、理由（ワケ）を聞かせてもらった。
それは中学３年生が素直に飲み込められるものではなく、いくら２次元が好きだからっといって素直に理解できるものには到底及ばなかった。
しばらく間を空けて、混乱する頭を無理に働かせながら、ようやく言葉を零し出す。

「……で、簡単に言うなれば、私は２０１０年を永遠ループしているこの世界にトリップしてきたと」
『はい』
「で、その子がまたこの世界に戻ってこられるように、発端者の日端美乃を潰せと」
『はい』
「それで？　そいつを潰すまで私は元の世界に帰れないと」
『そういうことになりますね』

電話の向こうで確実に笑みを零しているだろう神様が想像できてしまう。
握っている携帯が妙な音をたてているが、気にせず会話を交わし続ける。

「随分と、面倒くさいね」
『私達もなるべく力を尽くしてみたのですが……予想以上に彼女の力が強くて強くて』

「段々話の内容がファンタジー化していってるのは全然気のせいじゃないんだよね、これがまた」

ハハ、と肩を竦めるが、向こうからは1ミリたりとも笑いは聞こえない。

「こんな冗談言ってる場合じゃないってか」

『本当に申し訳ないです。ですが、これ以上彼女を好き勝手させるわけにはいきません故。

今日はもう貴方の家に帰ってください。家の場所は貴方から見たら、綺麗に輝いていると思いますわ』

「え、ちょっ！　……切れた」

有無を言わさず切れた通話に、「少しは待てよ」と思う。けど、彼女にとっては急がなければならない事態が巻き起こっているのだからしょうがない。

溜息がつきたくなるのを我慢し、屋上を後にする。さて、ここを出発地点にするなら次の行き先は『家』か。なんか……嫌な予感がするねぇ。

（でも、まぁ面白そうだしいっか）

（神様に頼まれごととかファンタジー切っての依頼だからね、頑張らなくちゃ）

1年半振りの再開

屋上があるなら、ここは学校か会社かってのは分かることだ。因みに自分がいるのは前者の方だけど。
階段を降りて多分正面玄関っていう玄関から出ようとした瞬間、呼び止められるのは想定するべきだったよね、うん。

「おい、お前ちょっと待て」

背後からイケボで呼び止められ、ドアにかけようとした手を止める。ぎこちない動作で振り返ると、後ろには眼鏡をかけたイケメンの先生が。
両腕を組んで、私をじろじろと観察する先生にごくりと唾を飲み込んだ。

だって、もしかしたら私って忍び込んだとかそういうのだったらこの場合とてつもなくヤバイと思うし。
もしそれで上手く難を逃れても、次はどう対処すべきかわからないし。
非常に危ない場面に冷や汗を2，3粒流れるのを感じると、先生がぽつりと呟いた。

「……あ、お前明日転校してくる織原か」
「え？」

転校、という言葉を聞いて一瞬戸惑った。てっきりここの在学生だと思っていたからだ。
動揺する私に先生（？）　が心配そうな目線を向けてくる。体調が悪いとでも見られているんだろうか。

パニくる私は一度呼吸を整えると、小さく頷き肯定した。

「はい。転校してくる織原です」

「なるほどな、その様子じゃ学校の下調べってやつだな。でもするんなら先に先生に言ってくれないと」

「すいません……」

「分かればいいんだよ、分かれば。まぁ、今日はもう遅いし気をつけろよ」

そう言ってドアを開けてくれる先生。私は軽く挨拶をすると、これ以上何かを言われる前に鞄の紐を強く握りしめると、走ってそこから逃げ帰った。

「相変わらず人の言葉に疑い持たねー奴だな、お前は」

だからこそ私は、遠くなっていく私を見つめる先生が呟く声を知らなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

「自分の家が輝いて見えるって言ってたけど……なくね？」

すっかり暗くなった道を歩きながら、周りを見渡すが一向に家は見つからない。

後ろを振り返ってみると、学校はかなり遠くにある。

「結構、遠くまで来たな……」

元々知らない道を携帯の地図で進んできた。が、さっきで携帯のバッテリーが切れ、強制終了。
それから知らない道をあっちいったりこっちいったり……勿論、おかげで迷ってます。迷子です。
ふと腕時計を見れば、時刻は7時４３分。おっと、健全な小学生以下の子供は寝ている時間じゃまイカ。そして、危ないおじさん達が始動する時間ですね。

「これ以上迷ってたら体力的にもヤバイな……あー、もうっホントどこにあんだよっ」

ぶつくさ愚痴りながら、曲がり角を曲がると右の頭上がなにやら光ってます、光ってます。
もしや、と思い顔を見上げると、そこには暗闇に包まれる時間帯には不釣合いな家がぽつんとあった。

「あ、はは……やっと、見つけた」

疲労困憊で倒れそうな私をよそにらんらんと輝く家。確かに、輝いてる。
こんな自然発光してるけど、ほかの人には見えないとかそういう設定になってるんだろうな、とか思いつつ、家の門を開けてみる。

「うわ、豪華」

入った瞬間零れたのがこれってどうかしてるぜ！　って思うけど、これは凄いよ。
玄関まで白いタイルが敷き詰められているのはまだ許す。周りに花

が植えてあるのも許す。
ただ、さ。その植えてある花が青い薔薇っていうのはどういうこと？
「確か２００９年の１１月辺りに普通の薔薇の約１０倍の値段で売られたんだよね、青薔薇って。
……って、誰に同意を求めてるんだか」

誰も傍にいないことを忘れていて、ついつい後ろを振り返ってしまう。
だけど、後ろは誰もおらず返事もなく。寂しくなって、つい自分を嘲笑い。
もしここで友人がいたらなぁ、なんて思うけれどそれはない、と断ち切って家の中に私は足を進めた。

＊　＊　＊　＊　＊

家の中を十分に探索した後、私は今2階にあった3部屋の内、右の奥にあった部屋の中にいる。
充電器をぶっこんである携帯で、今度は眠たくなるまで暇潰しにテトリスで遊び呆けている状態。
まぁ、でも実際はあの神様からいつ連絡くるか分からないからずっと携帯の側にいるだけなんだけども。

「っく、あー、危なっ！　うわわっ、ちょ、クソッ、あと少しだったのに……レベル9は辛いか、上まで貯まるのかなり早いし」

レベルが上がっていくにつれて上から降ってくるピースも早いと、中々目が追いつかない。
だけどそれがまた楽しい。けど、難しいからちょっとやる気なくす。

また最初からか、と嘆いていると手に振動が。画面を見ると、電話番号。

「あー、もしもし」
『こんばんは、私は貴方の愛する神様です』
「切ってもいいですか？」
『御免なさい、ふざけすぎました』

一瞬声分からなかったから本気で切ろうと思ったよ奥さん。

『その様子じゃ家に着いたみたいですね』
「途中で迷子になりかけたけどな」
『貴方ならありえそうですね』
「馬鹿にしてんのか」

さらっ言われた言葉が癪に障る。が、電話の主は先ほどのような慌てっぷりはなく。

『怒らないでくださいまし。ところで、協力者には会えましたか？』
「協力者……？」
『そう、協力者。まだ会えていない、ということはもうそろそろですか』

話がまったく見えないことに、小首を傾げる。だけど、声だけで会話している私たちにとってその動作は伝わるわけもなく。返答が返ってこないまま、何分か経ちそうになった時。
急に視界が何かによって真っ暗になった。覆いかぶさる何かは少し熱を持っていて、それが人の手であることは認識できた。

「うわっ、急に目の前が真っ暗になった」
『変質者にでも襲われているのですか？』
「さらっと危ないことを言うね」
『でも私の勘って結構当たるのですよ。きっと変態でロリコンでプレイボーイでマニアッ……』
「ちげーっつーの、全然テメーの勘なんて当たってねえよ。織原なんとかコイツに言ってくれ」

神様の行き過ぎた発言をどこかで聞いたことがある声が遮る。少しテノール気味で、落ち着いたその声。なんか聞いたことあるじゃないな、聞き慣れてるわこの声。どこだったけ？　私はどこで聞いてた？

……確か、1年半前……の、学校……確か、失踪……いや、行方不明？　……あ、もしや。

「もしか、しなくても……奥村？」
「おー、当たり」

目の前が明るくなりと同時に振り返るとそこには、先ほど玄関で会った先生がよっ、と片手を上げてそこにいた。
その先生が和やかに笑う顔は1年半前にいなくなった奥村そっくりで。
確かに言われてみれば、顔は大人びているけど雰囲気は同じで。
久々に会って嬉しいのはあるけれど、さすがに驚きの方が先に来るのが当たり前で。
私は、思いっきり叫びました。

「えぇぇぇぇ！？」
「煩っ！」
『感動の再開で普通は叫ばなくないですか？』
（いや、普通は叫ぶよ、これ！）
（っていうか、なんでここにいんの！？）

1年半振りの再開（後書き）

1年半振りに奥村君と織原さんが出会いました。良いことです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2667y/

Endless Game

2011年11月6日03時17分発行